スノーバレーボールの現状と課題
ーヨーロッパ選手権の視察を通してー

野口 京子[1)]，関根 正敏[2)]，野口 将秀[3)]

Current situation and problems of Snow Volleyball:
Through the inspection of the European Championship

Kyoko Noguchi[1)], Masatoshi Sekine[2)], Masahide Noguchi[3)]

Abstract

In this research, we aimed to grasp the present situation in the world of snow volleyball, confirmation of the rules referring to the CEV rule book 2017, grasp of the current situation through on-site inspection of the European Championship held in Austria from March 23 to 25, 2018, and a questionnaire survey for CEV officers through the three surveys of the present situation of snow volleyball and the future prospects which we see through, to clarify future development possibilities and issues to adopt the Winter Olympic Games . Based on the results of the survey, the following was clarified.
① With almost all the rules except that the score is 11 points, competitions are held in accordance with the same rules as beach volleyball.
② The first European championships were held in Austria, and 1,100 spectators stated in three days, and the audience was on the verge of success. Almost all the competitors participated in the beach volleyball experience, and at this stage I heard that the position is being positioned as beach volleyball in the summer and snow volleyball in the winter. ③ FIVB and CEV are starting to focus on promoting the snow volleyball, and there is a move to push up to the official event of the winter Olympics in earnest.
Continuing to grasp the trends in the world as well as to think about the possibility of dissemination in Japan, it seems to be necessary.

Key Words: snow volleyball, European Championship , Austria
キーワード：スノーバレーボール　ヨーロッパ選手権　オーストリア

Ⅰ. 緒　　言

雪の上で行うバレーボールとして，スノーバレーボール（以下，スノーバレー）というスポーツがある．これは，屋内で行なわれるインドアバレー，砂浜で行われるビーチバレーに次ぐ，第三のバレーの形であると言えよう．日本では唯一，一件の研究報告があるだけのこのスポーツについて，本研究において考察を深めていくこととする．過去の研究（野口，2007）によると，雪の上で行うバレーボールは，4人制を採用してレクリエーションの一環，あるいはスキー場の集客や地域活性を目的としたイベントとして行われていた．古くは十日町市や富山市山田などで1990年頃から開催されていたが，その後は2001年頃から飯山市戸狩温泉や新庄市をはじめとする6都市において開催されるなど，限られた地域で実施されてきた，比較的歴史の浅い取り組みであると言える．例えば戸狩温泉などでは，バレー界の著名人を看板に，「リンゴ豚カップ」と称して，仮装などのアミューズメント要素を伴って開催されている．近年では2017年に西川町民間沢スキー場において，また2018年に鹿角市花輪において雪上バレーボールのイベントとして大会が開催されているようであるが，各地の取り組みは，地域おこしに向けたレクリエーションイベントの一環として開催されているという点で共通していることが窺える．本研究においては，こうした国内の動向を鑑みつつ，商業性や競技性の高い国際大会が開催されはじめた国外のスノーバレーの現状に目を向けていく．

スノーバレー同様，屋外のバレーボールとして思い起こされるのは，ビーチバレーボール（以下，ビーチバレー）である．日本ビーチバレー連盟によると，ビーチバレーは元々1914年のある日，砂浜の上でバレーボールをしたら面白いのでは，と考えたハワイアンが新しい遊びとして始めたのが起源だという．その後，1930年には2人制のビーチバレーが定着して本格的に競技となり，1950年代以降ポピュラーなスポーツになっていった．1992年第25回バルセロナ大会において，オリンピックのデモンストレーション競技として紹介され，1996年第26回アトランタ大会からは，夏季オリンピックの正式種目に認められた．

デモンストレーション競技から正式種目へというビーチバレーの歴史と同様のストーリーが，現在，スノーバレーをめぐって描かれつつある．2018年平昌冬季オリンピックの会場では，FIVB（国際バレーボール連盟）やCEV（ヨーロッパバレーボール連盟）が中心となりエキシビション

1)：長野大学　Nagano University
2)：作新学院大学　Sakushin Gakuin University
3)：京都大学非常勤講師　Kyoto University Part-time Lectuer
（受付日：2018年6月25日，受理日：2019年2月17日）

マッチが開催され，競技の魅力や将来性を発信することが目指された．バレーボール競技を統括する国際競技連盟がこうしてスノーバレーの推進に着手したということは，バレーボール界として，スノーバレーの冬季オリンピック正式種目へ向けた動きを本格化させていくと推察される．

Ⅱ. 目　　的

こうした国外の動向を受けて，本研究においては，CEV の発行しているルールブック（2017）を参照してルールを確認するとともに，2018 年 3 月にオーストリアで開催された第一回ヨーロッパ選手権大会を現地にて視察し，CEV 役員への質問紙調査の結果について報告する．本研究の目的は，それらの調査を通して，スノーバレーの振興に力を入れている欧州における現状を競技ルールや大会運営，統括組織役員の認識という視点から把握し，その発展可能性や冬季五輪種目採用に向けた展望について考察することで，今後，スノーバレーのあり方を検討していくための基礎資料としてまとめることである．

Ⅲ. 方　　法

1. CEVルールブック2017を参照したルールの確認
2. 2018年3月23～25日にオーストリアで開催されたヨーロッパ選手権大会の現地視察を通した現状の把握
3. CEV役員への質問紙調査を通して見るスノーバレーボールの現状と今後の展望

なお，3 の質問紙調査の質問項目は，以下の 3 項目からなるものである．まずスノーバレーボールの歴史を知るための質問として，「スノーバレーボールの歴史を教えて下さい．いつ生まれ，どこで国際試合が開催され，過去にどの国が優勝しているのか，など」という質問を設定した．また 2 つ目に，スノーバレーボールの展望を知るための質問として，「スノーバレーボールの発展可能性のビジョンを教えて下さい．また，冬季オリンピック正式種目とすることの意義はどのように考えていますか？」という質問を設定した．そして，大会開催にあたっての現状を知るための質問として，「イベント運営における現状と課題について教えて下さい．」という質問を設定した．.

Ⅳ. 結果と考察

1. ルールの確認

CEV が公認する現行の競技規則によれば，スノーバレーは多く点でビーチバレーと同じルールが用いられており，ビーチバレーの延長として競技が行われていることが窺えた．例えば，ビーチバレー同様，2 人制で，使用しているボールはミカサの VLS300 であった．またインドア種目との共通性もみられ，ネットの高さは男子が 243cm，女子が 224cm であった．コートは 8 メートル四方，サーブエリアは後方 2 メートルとやや手狭に設定されている．ビーチバレーにおいては，コート後方はエンドラインから 5 ～ 6 メートルを確保するよう設定されていることからも，スノーバレーにおける 2 メートルは特徴的に狭い設定となっていると言えそうである．図は，CEV ルールブック 2017 に記載されているものを引用した（図 1）．

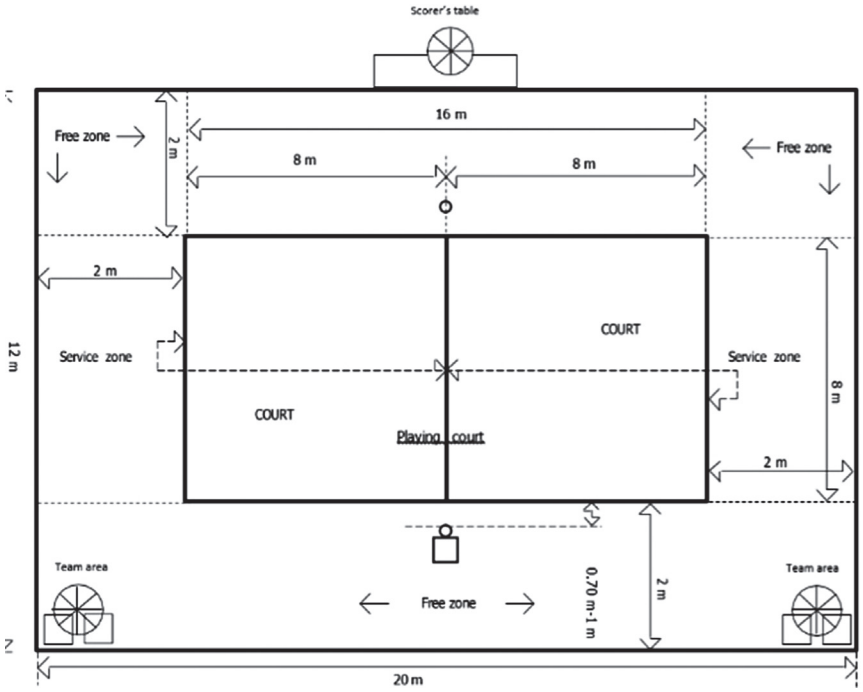

図1

図2

ヨーロッパ選手権においては11点マッチの3セット制，決勝3位決定戦では5セットマッチが採用されており，両チームの合計点数が7の倍数でコートチェンジを行う．ビーチバレーの公式試合における点数は21点制のため，得点に関しては違いが見られると言えよう．なおブロックのワンタッチは，そのチームのプレーの1回に数える点で，ビーチバレーと同様である．

2．第一回ヨーロッパ選手権大会の現地視察

2018年3月の23日から25日にかけて，第一回ヨーロッパ選手権がオーストリアのWagrainという地域で開催された．会場はロープウェイで山頂まで登った海抜1850メートルの高地に3コート設営して開催され，収容客数は約600人とされていた．現地メディアの発表によれば，3日間で述べ1100名の観客が会場を訪れていたということであった．参加チーム数は男女それぞれ24チームずつであり，初日に予選リーグ戦，2日目に決勝トーナメント，最終日に準決勝，3位決定戦，決勝が行われ，優勝賞金は20.000 EURであった．初日は平日であったこともあり観客もまばらであったが，土曜日曜と休日には現地のスキーヤーなども足を止めて観戦するなど，会場は満員で熱気に包まれていた（図2）．

会場には音響設備やDJ，実況やチアリーダーなど，観客を盛り上げる工夫が凝らされていた．試合中にもテンポの良い音楽が流され，得点が入ったり，ビッグプレーが生じた際にはDJの大きな声が会場に響き渡った．試合の合間には，チアリーダーがパフォーマンスを披露し，試合「以外」の場面にも観客の注目を集めるような配慮がなされていた．また，観客席を取り巻くフレームには出場国の国旗が飾られており，「国際大会」であることをイメージさせるような演出もなされていた．スポンサーのロゴやマークが記された支柱や看板など，大会運営を支える企業の露出にも気配りがなされているようであった．

試合の競技レベルは高く，ドイツのメディアへのインタビューによると，ビーチバレーボールの選手が大半だということであった．女子のベスト4はラトビア，リトアニア，ロシア，トルコで，初代ヨーロッパ選手権優勝チームはリトアニアであった．この優勝ペアは，2015年第1回ヨーロッパ競技大会ビーチバレーボール部門の銅メダリストであった．また，男子のベスト4はロシアが2チームにリトアニア，ドイツで，優勝チームはロシアチームであった．現地で僅かながら選手へのインタビューに成功した．ある女子選手のペアは，「スノーバレーボールは新たなスポーツであり，新たな挑戦と捉えて競技に参加している」，と答えてくれた．普段は専業主婦で家庭があるにも関わらず，競技にある程度専念できる環境があるようで，この「新たなスポーツ」に自身の活躍の場を求めて挑戦しているようであった．また別の選手は，インタビューでビーチバレーと比較した際のスノーバーレーの難しさについて，「ジャンプはしやすいが滑ってしまうなど，五分五分である」と述べていた．フィールドが「滑る」ことがスノーバレーの独自性であると認めつつも，どちらの競技も動きを制限する足場への対応が必要になるという点に競技上の難しさがあると考えているようであった．なお，試合の様子を観察したところによると，多くの選手がスパイクシューズを履いてプレーしており，滑るフィールドに対する対策を施していることが窺えた．

3．CEVの役員への質問紙調査

ヨーロッパバレーボール連盟（CEV）の役員への質問

紙調査を依頼したところ，快諾され，2 名より後日メールにて詳細な解答を得ることに成功した．各質問項目に対する回答を，以下にまとめることとする．

(1) スノーバレーボールの歴史について

最初の公式のスノーバレーの試合は，2008 年にオーストリアの Wagrain で開催された．これは，今回の欧州選手権の開催地と同じ場所である．それ以前には 2006 年 にオーストリアの Obertauern でスノーバレーの大会が開催されたことはあった．しかしこれは競技会というよりはレクリエーションの傾向が強いものであり，競技水準の高い選手が集う大会としては Wagrain で開催されたものが初であり，ここがスノーバレーの発祥の地といっても過言ではないと考えられる．

オーストリアバレーボール連盟（OeVV）は，2011 年に初めて，スノーバレーボールを連盟の公認種目として正式に定めた．ヨーロッパバレーボール連盟（CEV）は，2016 年に欧州ツアーを主催する運営組織の設置を承認し，チェコ，オーストリア，イタリアの 3 会場でトーナメントを開催した．その後，2017 年にはトルコ，チェコ共和国，スイス，スロベニア，リヒテンシュタイン，イタリアの 6 カ国で 7 つのトーナメントが，2018 年には，トルコ，イタリア，スロベニア，ジョージアの 4 カ国で 6 つのトーナメントが催された．

FIVB の支援を受けて，ヨーロッパ以外で最初の国際的なスノーバレーボール大会が，2017 年 2 月 12 ～ 13 日にイランの海抜 2,650m の Dizin というスノーリゾートで開催された．イランの国営テレビは全国的に放送し，国内に新しいスノーバレーの情報を発信しているなど，ヨーロッパ以外の国にも徐々に広がりつつある．

このように欧州ツアーが定着しつつあり，ヨーロッパ以外の地域でも着手され始める中で，FIVB は，2018 年の平壌冬季オリンピックでスノーバレーボールのエキシビションマッチを開催した．この試合には，ブラジルのジバとエマニュエル，オーストリアのシュテファニー・シュバイガー，ニコラス・ベルガー，セルビアのウラジミール・グロビッチ，韓国のキム・ヨンギョン，中国のチェン・スンなど，7 つの国からバレーボールとビーチバレーの有名選手が集まった．世界中の多くのテレビ局とメディアがこのイベントの様子を放映し，新しい種目の存在を多くの人びとに知らしめるとともに，会場には約 15 名の IOC（国際オリンピック連盟）のメンバーが出席し，この競技を直接観戦する機会となった．

(2) スノーバレーボールの発展可能性のビジョンと，冬季オリンピックの正式種目とすることの意義

FIVB と CEV が長期戦略として描くのは，スノーバレーを冬季オリンピックの正式種目にすることである．夏季大会で採用されているビーチバレーと同様に，従来からのインドアのバレーボール以外の種目を増やすことが目指され，ビーチバレーという新たなスポーツが重点的に振興されている．

そこで，当面の目標として掲げられているのは，2020 年または 2021 年のインドアの世界選手権の際に，本格的なワールドツアーを開催することである．オリンピックという国際競技大会で正式種目として採用されるためには，その競技が世界中で実施されていることが重要な要素となり，そうした素地を整えていくための道筋の一つとして「ワールドツアー」が構想されている．しかし，現実にはワールドツアーの開催には多くの困難が伴うと想定されており，その実現にはもう少し時間を要すると見込まれている．

FIVB および CEV の最優先事項は，ヨーロッパおよび世界各国でスノーバレーを普及発展させていくことであり，スノーバレーに接する機会を積極的に提供し，誰もがスノーバレーに親しめるようにしていくことでもあるという．競技としてのスノーバレーの環境は漸次整いつつあるように見受けられるが，「誰もが」スノーバレーを親しめるようにするための取り組みがいかに胎動してくるのか，こうした視点からの展開が期待される．

(3) イベント運営における現状と課題について

CEV 役員の多くは，第 1 回ヨーロッパ選手権においてヨーロッパ各地から 18 カ国が参加していたことは，スノーバレーボールの着実な成長を示していると理解しているようである．より多くの競技会を開催し，より多くの国がスノーバレーボールに参加するにつれて，ゲームの基準と技術レベルが向上していくことが考えられる．賞金は，例えばビーチバレーと比較して，依然として非常に低い水準にとどまっている．これは，競技力を高めるために多くの強化費が必要となるアスリートの側にとって非常に重要なことである．

FIVB や CEV はイベントの予算を増やし，スポンサーを獲得し，国家連盟と政府をより多く関与させる

ことによって，スポーツをもっと促進する必要があると認識している．それが現在取り組んでいるステップである．

スノーバレーは,「ダイナミック」で「エキサイティング」なスポーツだと考えている．山々の素晴らしい景色を背景として展開されるスノーバレーは，魅力あるものであり，またビーチバレーと同じような「祭りの雰囲気」を山々に持ち込むことができる．ただし，選手の健康と福利が最優先であるため，医療部門の整備や気象条件といった環境を整備し，最適な環境を選手に提供することにも，引き続き尽力していく．

V. むすびにかえて

本研究は，１．CEV ルールブック 2017 を参照したルールの確認，２．2018 年 3 月 23 ～ 25 日にオーストリアで開催されたヨーロッパ選手権大会の現地視察を通した現状の把握，および３．CEV 役員への質問紙調査を通して見るスノーバレーの現状と今後の展望，という 3 つのプロセスを通して，スノーバレーの世界における現状を把握し，今後の発展可能性や冬季五輪種目採用に向けた課題について明らかにすることを目的とした．調査の結果より，以下のことが明らかとなった．

①点数が 11 点制であることを除けば，ほぼ全てにおいて，ビーチバレーのルールに則って競技が設定されている．

②第 1 回のヨーロッパ選手権では，3 日間で述べ 1100 名の観客が会場を訪れるなど盛況を見せていた．競技参加者のほぼ全てがビーチバレー経験者であり，選手や大会主催者にとってみれば，現段階では夏はビーチバレー，冬はスノーバレーという位置付けがなされていることが見受けられた．

③ FIVB や CEV はスノーバレーの普及活動にも力を入れると主張し始めており，バレーボール界として本格的に冬季オリンピックの正式種目へ押し上げようという動きに発展していく可能性がある．

前述したように，ビーチバレーがバルセロナ大会においてデモンストレーション競技として紹介され，アトランタ大会から正式種目となったことを考えると，2018 年の平昌オリンピックにおいてスノーバレーのエキシビションが行われたことは，オリンピック種目としての採用をめぐるバレーボール界からのアプローチとして注目すべき出来事である．そして，2018 年 3 月 23 から 25 日にかけて行われた初のヨーロッパ選手権の開催とその「成功」は，オリンピックの正式種目に向けた重要な取り組みの一つとみて間違いはないであろう．しかし，日本国内においてはまだまだスノーバレーという種目の認知度も含めて普及が進んでいないのが現状であろう．朝日（2013）はビーチバレー選手の 90％がインドアバレーの経験者であり，困難も多くあるがインドアバレーとの共存を視野に入れたビーチバレーの推進が必要であると述べている．スノーバレーが今後国内において普及していく可能性を模索するのであれば，インドアバレーとの共存や，ビーチバレーとの兼任選手ということについて議論を深める必要がある．ルールが類似しているということは，求められる技術や戦術についての共通性が高いということであり，プレイーヤーの視点からみると, インドアバレーとビーチバレー, スノーバレーといういずれにも親しむことができるという可能性がある．競技力の高い選手が集まる大会が欧州で急速に広まっていっているように見えるのも，こうした選手という資源を既存の種目から転換することが容易であることと無関係ではなく，日本国内でもまずは，種目転向というかたちでアスリートを集めることになるだろう．

インドアバレーやビーチバレーとの関わり方という点に関しては様々な意見・立場があることが推察されるが，いずれにしても，そもそもスノーバレーという競技が存在することすら浸透していない国内の現状があることには違いはなく，まずは世界的な動向を知り，国内に浸透，普及させていくことが求められているといえるであろう．ルールとしてはほとんどビーチバレーと同様であることや，ヨーロッパ選手権出場者たちもビーチバレーの選手であることから，まずは国内にスノーバレーの存在が知れ渡り，ビーチバレーの経験者が兼任でスノーバレーに着手していくことが，日本国内でのスノーバレーの展開に向けた第一段階ではないかと考えられる．

また，スノーバレーの試合会場を誰もが楽しめるような空間にしている配慮は日本においても重視すべきであり，ヨーロッパ選手権の会場では，DJ やチアリーダーなどが場内の盛り上がりに一役買っており，エンターテイメント性をも重要視した大会運営であった．またメインスポンサーとして飲料メーカーの「レッドブル」が協賛しており，場内での試飲や試合間におけるパラシュートの演出などで大会を盛り上げる一幕もあった．選手たちはもちろん真剣そのものであるが，エンターテイメント性を重視した「魅せる」工夫も随所に散りばめられており，国内でのスノーバレー普及に向けたヒントになるのではないかと考えられる．

本稿は，スノーバレーボールの世界における動向を，国

内に向けて発信する最初の報告である．ヨーロッパ選手権の初開催や平昌五輪のエキシビジョンマッチを皮切りに，今後様々な国や地域へと普及し，近い将来冬季オリンピックの正式種目になっていくことが予期される．砂のビーチバレー，雪のスノーバレーと，一年を通したアウトドアスポーツをバレーボールという 1 つの競技を通じて実現するという意味で，スノーバレー普及の意義は大きい．雪がある限られた地域でしか開催が出来ないという不利な側面を内包しながらも，FIVB や CEV が主導的に普及活動に尽力していることから，スノーバレーが五輪の正式種目となり，世界中の人びとにとって，なおいっそう身近なスポーツになっていく可能性も大いにあるのではないかという展望を述べて，結語とする．

Ⅵ. 参考文献

朝日健太郎：わが国における ビーチバレーボール振興策に関する研究 . 早稲田大学大学院スポーツ科学研究科修士論文 .pp.1-49,2013

CEV Snow volleyball rules 2017.pp.1-38

日本ビーチバレーボール連盟公式サイト ,2018.4.5

野口京子：雪上バレーボール普及の可能性について ~ 開催地区実態調査 ~ バレーボール研究第 9 巻 第 1 号 .pp.53-55,2007